

contents

[コラム]

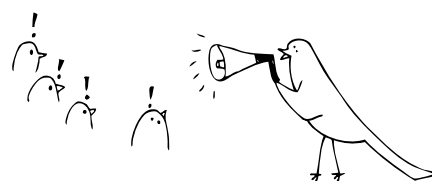
小中高における情報学教育の
新しいステージ
…松原伸一

[解説]

工業高等学校における情報教育の取り組み
—創造性豊かな工業技術者の育成を目指して—
…谷口和久

[解説]

アイルランドの大学における
コンピューティングサマースクール視察
…高岡詠子

■
■ Column

小中高における情報学教育の新しいステージ

教科「情報」は、従来からの“情報教育”との弁別が必ずしも明確ではなかったのかもしれない。その結果、何か新鮮味に欠け、関係者の間においても“新たな能力を育成する”という認識に格差を生じていたようである。したがって、一部の学校で設備計画の遅れが表面化したり、PC操作のみに重点が置かれたり、また、スキルに限りなく近い学習内容にとどまったりして、教育理念が十分に展開されていないという懸念が一部にあった。このような状況を踏まえ、改訂された学習指導要領では、新たな情報科教育のイメージを形成し、中長期的な展望として重要な役割があるものと改めて認識したい。筆者は、情報科教育で学習する内容を“文理融合の情報学”と位置づけ、明示的に、“情報学教育”と表現し、さらなるその後（10年後）の教育課程に期待している。現在では、“情報学教育”の主たる部分は、高校における教科「情報」の学習時間に根拠を置いているが、小学校や中学校などの各教科では、いわゆる“情報教育”が実施されているものの、“情報学”としての位置づけは必ずしも明確ではない。

情報学教育を推進するためにはいくつかの課題がある。たとえば、情報機器等の設備充実、学校の情報通信基盤の整備、e-Learningや教育クラウドなどの教育システム環境の確立、デジタル教科書や学習コンテンツ等の教材開発、クラウド環境を効果的に活用する新しい教育方法の開発、そして、このような新しい教育環境で効果的に授業展開ができる有能な教員の養成など、限りなく続くものである。このような多分野・広範囲にわたる種々の課題を視野に入れて、小中高における一貫した情報学教育を実現するためには、この種の研究を幅広く呼びかけ、個人研究や共同研究における理論的かつ実践的な研究を推進し、その成果を漏れることなく結集させることが必要である。

そこで、筆者は、J.S.Brunerの「教育の過程」にならい、日本においても情報学とその教育に関与し、第一線で活躍する研究者・教育者が互いに協力し、日本の再生・復興に向けて、総力を結集する必要があると考え、「日本版ウツズホール会議」の開催を提案している。この会議を成功させるためには、情報学教育に関心を寄せる人たちの連携が必要で、2011年12月23日に情報学教育関連学会等協議会が発足し適宜進められている。情報学教育の新しいステージに向けて、皆様のご理解とご協力を賜れば幸いである。

松原伸一（滋賀大学）

※情報学教育関連学会等協議会議長